

死者の火

儀礼伝承の潜伏と顕在と

Research Notes

関沢まゆみ

1 はじめに

「生老死と儀礼の通史的研究」は、日本の古代、中世、近世の公家や武家の儀礼から近現代の一般国民の儀礼まで通史的にその変遷の把握を試みる観点に立つものであるが、儀礼の継承、変貌、喪失という当初から想定された展開以外に、いったん喪失された儀礼のちに復活するという例など、儀礼伝承の通史性については時代ごとの環境的な諸条件をも勘案した、より動態的な展開の側面への注目が必要であり、その伝承のダイナミズムの分析が必要であることが最近明らかとなってきた⁽¹⁾。そして、それら儀礼伝承の変遷とそのダイナミズムについての研究はたいへん参考になるものではあるが、それらにおいても一度途絶えた儀礼の復活という視点は十分ではない。その重要性を気づかせてくれたのは、フランス国立高等研究院のジャン＝ノエル・ロベール教授によるフランスにおける昨今の中世の巡礼の復活ブームの紹介、同じくフランスINALCOのM・ルッケン教授による記憶とイメージの関係性の指摘であった。そこで、さらに情報収集を試みたところ、そのような一度は中断され喪失した儀礼が近代以降新たに復活する具体的な事例として

その復活の理由を追跡する上では、フランス中部リムーザン地方などに分布する「死者の火」の調査が有効でありそれに対する研究展開の必要性が痛感された。

生と死をめぐる儀礼研究は、靈魂觀念や他界觀念にも関わり、たとえば死者の「慰霊と追悼」をめぐっても文化理解と文化誤解や文化戦争などの問題が提起されている現在、文化研究は日本文化史の視点とともに比較文化史の視点を開拓して理論的な深まりを追及する必要がある。フランスの「死者の火」の塔と近畿村落の郷墓などの巨大な五輪塔の民俗的意味づけの歴史などは個別的な問題ではあるが、そこから広く伝承の喪失・中断・復活・変奏という伝承のダイナミズムを解読する国際的な広がりの中での比較文化論的な新しい研究視点の実践的開拓の必要性が浮上してきていると考える。⁽²⁾

2 郷墓と五輪塔

日本の墓塔を代表するものの一つが五輪塔である。その起源について

は、仏教で説く万物の構成要素である地、水、火、風、空の五大を五輪にかたどったもので、これを大日如来の三昧耶形であると説く真言密教の教えのなから生まれたものといわれているが、必ずしも明らかではない。

五輪塔の造立

墓塔としての五輪塔については、『兵範記』仁安二（一一六七）年七月二十七日の条に、藤原基実の遺骨を木幡の墓地（浄妙寺墓地）に埋めて、「其上立五輪石塔 又 構釘貫 其辺立六万本小卒土婆被書法華經六部也」と、釘貫（柵）を巡らして六万本の卒塔婆を立てた、とあるのが早い例とされている。鎌倉時代に描かれた「餓鬼草紙」の五輪塔と釘貫（柵）の画面を髣髴させるような記述である。現存する平安時代の在銘石造五輪塔としては、平泉中尊寺釈尊院墓地の仁安四（一一六九）年塔、豊後臼杵中尾の嘉応二（一一七〇）年塔、承安二（一一七二）年塔、磐城和泉の五輪坊墓地の治承五（一一八二）年塔の四基が知られている。また五輪塔と並んで古代中世においては宝篋印塔も造立された。そして鎌倉・室町時代に板塔婆の造立が盛んに行なわれるようになったが、のち一六世紀を中心として近畿地方一帯では小型の一石五輪塔が大量に造立された。それは小型の角柱状の石材に刻みを入れて五輪塔型にしたもので、これは中小武士層だけでなく、有力農民層の場合にも近畿農村ではさかんに造立されたものと考えられている。そして、江戸時代になると石塔の造立の風は全国的に庶民階層にまで広がり定着していき、板碑型、箱型（櫛型）、角柱型など各種の型式があらわれた⁽⁴⁾。

これらの石塔の変遷過程で注意されるのは、呪術的な陀羅尼を蔵する石卒塔婆から、浄土思想の定着とともに大日如来や阿彌陀如来そのものをあらわす五輪や弥陀種子の板碑の流行へと変化するなかで、死霊鎮撫、死者供養という二つの機能のうち、後者の比重が大きくなっていった点である。さらに、江戸時代には死者の法名を記す各種の型式の石塔が流

行し、死後の浄土往生の思想の徹底ということと、その一方で近世以来の庶民の間での家の觀念の發達が指摘されている⁽⁵⁾。

以上のように、大型五輪塔は平安末期に有力貴族の墓塔として、鎌倉期以降は武士や僧侶の墓塔として、また近畿地方ではとくに奈良盆地などに展開した大規模墓地である郷墓⁽⁶⁾における惣供養塔として、それぞれ造立され、中世末から近世初頭の近畿地方では、在地の中小武士層から有力農民層までもが一石五輪塔を造立するようになっていた。そして、かつての大型五輪塔はその姿を消していったのである。

大和吐田郷と上田角之進伝説

ところが、現在でも奈良県下の郷墓地帯には新しく近代以降になって造立された五輪塔の例がみられる。たとえば、奈良県御所市名柄（旧吐田郷）の日蓮宗本久寺境内にある上田角之進の墓塔である。これについては別稿で詳論しているところであるが、その一部を紹介すれば以下のとおりである。吐田郷地域の水越川水系にはその上流から、関屋、増、名柄、豊田、宮戸、森脇の六大字がいわゆる水郷を形成している。水越川の水源は金剛山にあるが、この水をめぐって歴史的に大和側と河内側との間ではげしい水論が繰り返されてきた。吐田郷ではこの水越川の開拓者として上田角之進（元和三（一六一七）年三月一日没）という伝説上の人物の名が伝えられている。上田角之進は大和側の水不足を解消するために、もともと河内側に流れていた金剛山の水を大和側へ流れるように上流でおおがかりな開削工事を行なった人物であり、元禄一四（一七〇二）年の河内側との水論における大和側の勝因は水越川の水がその工事によって事実上、大和へと流れ落ちていた事実が検使奉行に認定されたからであった。そこで、水越川の開削者として上田角之進の名前がその功績とともに語り伝えられてきているのである。それ以降五〇年ごとに角之進の報恩大法要が営まれ、文化一三（一八一六）年に二百回忌、安政四（一八五七）年に二百五十回忌が営まれ、「南無妙法蓮華

経 為善久菩提 元和三年三月十八日」と書かれた供養塔が建てられた。これは五輪塔の型式ではなかったが「安政四丁巳年三月十八日 貳百五拾回忌為菩提再建立」と記されており、安政四（一八五七）年に建立されたものであることがわかる。

しかしその後、明治一四（一八八一）年三月に、吐田郷中の名前で本久寺本堂前に建立された角之進の供養塔は五輪塔の型式であった。そしてその五輪塔とは人びとにとってこの近隣の郷墓である極楽寺墓や九品寺墓などで多く見られる中世の記念碑的な意味をもっている伝統的かつ歴史回顧的な墓塔型式なのである。

本稿では、この日本の五輪塔のように近世前期で一度は喪失した型式が近代以降に新たに復活する事例や、また儀礼として一度は喪失したものがその後復活する場合のその理由の追跡等に向けて、墓地と死者表象という問題からフランス中部に分布する「死者の火」の塔の調査事例の紹介を行なっておくこととする。

3 「死者の火」の分布と実態

分布

フランス中西部に「死者の火」(la lanterne des morts)と呼ばれる高さ約六〜八メートルの円筒形もしくは四角形、六角形、八角形などその角数はいくつものタイプがあるが、石造りの塔が分布している。とくにリムーザン地方においてはその分布が集中的にみられ、現在では一二県においてその存在が確認されている。たとえばオート・ヴィエンヌ県に一九個、クルーズ県に五個、ヴィエンヌ県に七個、ドルドーニュ県に五個、ル・ピュイ・ドゥ・ドーム県に四個などである。かつて、少なくとも一八八二年のルックラ神父の記録 (Etude sur les lanternes des morts, de l'abbé Lecler, Tulle imprimerie Grauffon) によればヴィエンヌ県には二四個存在していたことが記されているが、老朽化とともに壊

された例も多いという。

塔の下部には東向きに扉があり、そこからランプを入れられるようになっており、上部には火を掲げて明かりを照らしていたと推測される小さな窓がある。また、西向きに祭壇が取り付けられている例もみられ、これは神父がエルサレムに向かってミサを行うための祭壇と考えられている。

墓地の中央付近に位置し、一〜一〇段の階段の上に建てられている例のほか、道端に建てられている例もあったといわれている。この「死者の火」の目的は、死者の追悼のためとか、旅人の道しるべのためとか、さまざまな解釈が行われている。

この「死者の火」の塔の分布については、それがフランス北部や南部には希薄なのが特徴である。そして、その理由として一世紀以降、この中部地方においてゴール人がキリスト教化していった、もしくはキリスト教化しようとした道筋に沿って建てられたものだからという仮説が提示されているが、それについてはまだ確証はなく分布の意味は不明である。

調査地

実際に、二〇〇六年一〇月末から一一月初めにかけてのリムーザン地方、ヴィエンヌ県における私たちの調査で確認した「死者の火」は、コニャック・ラ・フォーレ、サン・ヴィクトルニエン、オラドゥール・スール・グラス、サン・ジュニエン、オラドゥール・サン・ジェネ、ラ・ドラ、ランコンという町や村の合計七カ所の事例であった。

このうち、積極的に死者の火の塔を守ろうとして活動を行っている夫婦の事例を紹介する。

コニャック・ラ・フォーレの事例

コニャック・ラ・フォーレに、「死者の火」の塔を守る運動をしてい

表1 調査地一覧

地名	立地	建立年	形状
コニャック・ラ・フォーレ Cognac-la-Forêt	墓地	13世紀	四角形(高さ6.5m)
サン・ヴィクトルニエン Saint-Victurnien	墓地	12世紀	四角形(高さ7m)
オラドゥール・スール・グラヌ Oradour-sur-Glane	墓地	12世紀	四角形(高さ6.5m)
サン・ジュニエン Saint-Junien	教会(屋根)		屋根部分の塔*
オラドゥール・サン・ジェネ Oradour-saint-Genest	墓地	12世紀	八角形(高さ8.86m)
ラ・ドラ La Dorat	教会前		円筒形 兵士の石像・電球有
ランコン Rancon	旧墓地跡(教会近く)	12世紀	円筒形

*地元には、教会の屋根に設置されているのは「死者の火」に分類されないという人もいる。
高さは、Michèle Tharaud氏提供資料より。

るタロー夫妻(M. Claude Tharaud(一九四二年生まれ)、Mme. Michèle Tharaud(一九四四年生まれ))がいる。彼らは会社や学校を定年退職の後に、地域の伝統文化に興味をもって、死者の火の保存ほか夏至の日のサン・ジャンの火祭りを復活したり、牧草地のすみにあるヤギのために石を積んで造られた古い時代の小屋の保存などの活動を五三人のメンバーを組織して行っている。

タロー夫妻によれば、コニャック・ラ・フォーレの墓地の「死者の火」



写真1 死者の火(コニャック・ラ・フォーレ)

は、一一〜一三世紀に建てられたと考えられている。この一一世紀頃というのはこの地方にキリスト教が広められようとしていた時であり、それと関係があると考えられるという。どのように火を焚いていたかを示す資料はない。ただ、墓地にあることと、西向きに祭壇が設置されていることから、葬式のような何らかの死者のための儀礼がこの塔のもとで行われていたことが推測されるだけである。かつては、教会の床の下に死者を埋葬していたが、一般のお金のない人々は教会の外の墓地を利用していた。一八二〇年以前は教会の隣にあった墓地に「死者の火」もあった

たはずで、それが現在の村はずれの墓地に移転したのだという。

現在、死者の火の塔は墓地内の小高い丘にあり、階段が土の中に埋もれている。一九三九年五月にフランス政府によって歴史的建物に指定され、一九八二年にフランス政府の費用によって一部改装された。これを維持していくのに費用がかかるため、市役所の中には塔が壊れてなくなるのを待っている人がいるくらいだと夫妻は嘆く。一般の村の人は「死者の火」だから、死の話題ははばかられてこれについてあまり話をしただけではない。そのためどのような使われ方をしていたかという言い伝えもまだ収集されていない。

ルックラ神父の資料によれば、リモージュの教会の例では、キリスト教の特別な日の前日の夜に火をつけており、また一月二日の死者の日 (le jour des Morts) には火をつけていたという。神父はこれを死者の火 'la lanterne des morts' ではなく、'les funaux', 'le funal' と表記している。(港などの) 標識灯の意味である⁽⁸⁾。しかし、著者がキリスト教の教義を絶対視する神父という立場にあったことを考えると、一般には「死者の火」と呼ばれていた状況であったとしても、ルックラ神父がそのような民俗信仰を認めずに標識灯と記した可能性は大である。

マダム・タローさんは新しいシステムを導入して太陽の光を当てようとしたが反対する人もいたため、実現していない。しかし、なんとか「死者の火」の塔の窓に光を灯したいと考えているという。

考察

現在では限られた村や町にのみ残存している「死者の火」である。その立地は墓地にあるタイプと教会近くにあるタイプとが確認されたが、教会から村はずれへと墓地の移転が行われた場合には「死者の火」の塔も移転された例が多いと推測される。旧墓地跡に現在も塔が残されている例 (ランコン) もあり、死者を埋葬する墓地に「死者の火」の塔が建てられる形が基本であったと考えられる。すでに現在では、この「死者

の火」の塔に実際に火が灯されることはない。また、いつ、誰によって、どのように使用されていたか、つまりどのような機会に火を灯していたのか、についての伝承も確認できない。

4 死者の表象としての「死者の火」のイメージ

—オラドゥール・スール・グラヌの事例—

調査地の一つ、オラドゥール・スール・グラヌの村はずれの墓地の中央には、一二世紀に建てられた古い「死者の火」の塔がある。やはり一九世紀に行われた墓地の移転によってこれも移されてきたものである。そして、この墓地にはその奥にもう一つ、二〇世紀に建てられたコンクリート製の新しい「死者の火」の塔が立っているのがその特徴である。前述のように、すでに遺跡とみなされ、使い方の伝承すら失われている遺物としての「死者の火」の塔が二〇世紀になっても一度建てられた背景を追跡してみる。

犠牲者の墓地

これは犠牲者の墓地 (Le tombeau des martyrs) と呼ばれている区画である。オラドゥール・スール・グラヌは、一九四四年六月一〇日にナチスの親衛隊 SS によって村の住民たち老若男女すべてが殺害された。犠牲者は六四二人で、うち男性一七七人、女性二四〇人、子供二〇五人であった。

一九四四年六月、チュール (Tulle) とリモージュ (Limoges) に八、五〇〇〜九、〇〇〇人の SS が移動を行い、それに対してレジスタンスが抵抗を試みていた。チュールでは、一九四四年六月九日に九九人が首吊りで殺害され、三六〇人が強制収容所に送られた。また、マルスラ (Marsoulas) では、一九四四年六月一〇日に二八人が虐殺された。そのほかヴァリュール (Varrieux)、ラ・シャペロンヴェルコール (La Chapelle-en-Vercors) においても一九四四年七月二一日からドイツ人に

よる虐殺が行われた。このような状況のなか、オラドゥール・スール・グラヌにおいても虐殺が行われたのである。これらSSによる村や町を標的にした虐殺行為はレジスタンスへのみせしめとして行われたものであった⁽⁹⁾。

そのなかでオラドゥール・スール・グラヌでは犠牲者の数が六四二人と多数であったのと、その後、村全体に火をつけられ焼き払われたため、犠牲者の遺体が骨と灰だけになってしまつて個人の名前が確認できなかった点がその特徴であった。現在わずか二人だけ残っている生存者の一



写真2 死者の火(オラドゥール・スール・グラヌ)

人、ロベール・エブラス(Robert Hébras(一九二五年生まれ))さんに直接話をうかがうことができたが、彼によれば、六四二人の犠牲者のうち、五二人しか遺体の名前が判明しなかったのだという。

死者の名前がわからないので、葬式を行うこともできなかった。そこで、村全体をそのまま墓として残すことになった。チュールや他の虐殺が行われた町の場合、再建がなされたが、オラドゥール・スール・グラヌの場合は、戦後のド・ゴール將軍の来訪によって、一九四四年一月に歴史的遺跡に指定されたのである。

先に紹介したコニャック・ラ・フォールのクロード・タロー氏は当時まだ二歳だったが、この六月一〇日の夜、オラドゥール・スール・グラヌの町の方が一晩中真つ赤に燃えていたのを覚えているという。また、一九五〇年頃になって、遺跡の町を訪れたとき、女性と子供たちが集められて殺害された教会の中には骨がまだたくさん放置されたままだったという。

戦争終結後、ナチスの親衛隊SSによる虐殺事件の一つとしてオラドゥール・スール・グラヌの例についても審判が続けられ、一九五三年にボルドーの裁判所で判決が下った。オラドゥール・スール・グラヌの虐殺は、ラマーデイング將軍が指揮するナチス親衛隊SSの第三師団によって行われたことが判明した。彼らの中にはドイツ人兵士のほかにSSに強制的に入らされたというアルザス地方のフランス人兵士がいた。その両方に対していったんは死刑、強制労働、投獄等の重い判決が言い渡されたものの、すぐに特赦となった。遺族たちは、この判決に対して非常に落胆した。オラドゥール犠牲者家族の会は、戦後フランスの国家統合の名目のもとに言い渡されたこの判決を、犠牲者の尊厳をあいづけたものだとして憤慨した。遺族たちは犠牲者の骨灰を国家によって作られた記念館に移すのを拒んだ。そして、遺族たちは国家の補助を受けずに、寄付金によって、墓地の一角に六四二人の犠牲者の骨灰が入っ

ている墓地を造った。「死者の火」のモニュメントを中心にして、前方には二つのカプセルが造りつけられ、その中に、名前がわからない犠牲者の遺骨が納められた。また、この塔のバックには犠牲者の名前を刻んだプレートがたくさん並べられた。プレートには「SOUVIENS-TOI」覚えておいて」というメッセージが刻まれている。

この塔のデザインは、この地方の「昔の墓地には必ずある」といわれている「死者の火」(la lanterne des morts)のイメージで作られた。火を灯せるような扉と窓も作られているが、実際に火を灯すことはしていない。

コウメモラシオン

この犠牲者のために、毎年、イースター、六月一日の虐殺の日、一月二日の死者の日、一月二日の第一次大戦休戦記念日、五月八日の第二次大戦休戦記念日、にコウメモラシオンと呼ばれる追悼儀礼が行われる。

二〇〇六年一月二日の死者の日には、遺族会副会長ル・ペロー・アムリーさん(Le Berard Annelie (一九二九年生まれ))ほか、約二五人が参加して追悼儀礼が行われた。彼女は一九四四年当時一五歳で、町から一キロメートル離れた農村部に住んでいたため無事であったが、兄二人と従兄弟一人が犠牲になった。ほかに、ドイツに強制労働に行っていたから助かったものの、家族は全員殺害されていたという男性、奇跡的に逃げ切れたという生存者の男性の子供たち家族などが参列していた。午前十一時三〇分になると、犠牲者の墓地の後ろを通じて、国旗を掲げた男性四人を先頭に参加者が静かに行進して、「死者の火」の塔の両脇に立ち、菊とシクラメンの花が捧げられ、一分間の黙祷が行われた。

考察

オラドール・スール・グラヌの一九四四年六月に虐殺された市民のための墓地に建立された「死者の火」の塔のような事例は、ほかにもオー

ブ県のブシェール(Buchères)の一九四四年八月二四日にナチス親衛隊SSによる虐殺によって犠牲になった市民六七人の名前を刻んだプレートを台座に掲げた「死者の火」のモニュメントの例などがある¹⁰⁾。それらに共通しているのは、一二―一三世紀の建造物である「死者の火」が実際に使用されなくなつて、歴史的遺物として長い年月を経た後に、二〇世紀の人々によつて、ふたたび死者儀礼の表象物として再認識され、その形式を踏襲しながらあらためて死者儀礼の装置として再生されているという点である。

5 第一次世界大戦の戦死者の表象

フランスでは第一次世界大戦(一九一四―一八年)において多くの戦死者を出した。一九一八年の勝利を背景に、また一九一九年一月二五日に公布された「大戦中にフランスのために死亡した者の記念と称揚」についての法律により「祖国のために死亡した英雄を賛美するためには努力や犠牲に対して」コミュニオンへの、国の助成の原則が示されている¹¹⁾。そして全国の各町や村(コミュニオン)において、急速に記念碑が建立され、それらのほとんどが一九二三年以前に序幕されたという。その記念碑の数は約三八、〇〇〇基で、これをもたない町村はほとんどないだろうとさえいわれている。

その記念碑の立地と形態について分析したアントワヌ・プロの調査によると、全体の六〇パーセントを占めるいわゆる標準型といえるのはシンブルな裸の石柱で、市役所のある広場に建てられ、死者の名前を刻むだけでなく、「〇〇のコミュニオン(あるいはコミュニオン名のみ)、フランスのために亡くなった子供たちへ」と刻まれているものだという¹²⁾。プロはこれを「市民のモニュメント」と名付けている。

このほか、次のビクトル・ユゴーの詩の一節が刻まれていたり、「栄光」や「英雄」という文言が刻まれている例を、プロは「愛国のモニュメン

ト」と名付けている。これも公的な場やよく目に付く交差点に建てられている。この愛国のモニュメントには、石柱の頂部分にガリアの雄鶏やユージェヌ・ベネの像のように月桂樹の冠や、あるいはドラクロワの共和国の絵を真似て旗を風にはためかせた勝利の兵士などの寓意を含むものもある。これらにより、「愛国のモニュメント」は共和國的愛国と民族主義的高揚の境界にあると位置付けている。

そして、すでに死に面した「悲嘆にくれた兵士」の像がある。これは墓地や教会のそばに建てられ、十字架を伴う場合も稀ではない。これには犠牲を正当化する「葬儀のモニュメント」とプロは名付けている。このように犠牲を正当化することなく、像を伴わず、「〇〇のコミュン、死亡した子供たちへ」「・・・死者たちへ」「戦争で死亡した兵士たちへ」などという単純な碑文の、純粹に葬儀的なモニュメントも数多くある。

そしてプロによれば、「この多様性はモニュメントが建てられた時代の地元の政治体質が非常に反映されているものであり、(中略) コミュニンの死者の個々の名前を永遠に保存する」ためのものだという⁽¹³⁾。そして、モニュメントに死者の名前を刻み、十一月一日の第一次大戦休戦記念日のセレモニーにおいて、死者一人一人にオマージュ(hommage・尊敬の意味)を捧げることが重要なのだという。

前述のオラドール・スール・グラヌの第一次世界大戦の戦死者の追悼のモニュメントは、教会内に、個人の名前を刻んだプレートとして掲げられていた。この戦死者たちの場合には、歴史的な「死者の火」の塔の「再生」はなかった。

しかし、一九四四年の一般市民の虐殺の犠牲者の場合には、伝統的な「死者の火」墓」というイメージが強烈に記憶の奥底から沸きあがり、そこから塔の再現への願望が共有されたといえる。戦争の死者のあり方にも、兵士と一般市民、戦闘死と虐殺死、少数と多数、などいくつかの相違がある。そのなかでも、とくに注目されるのは、フランス国家のた

めに犠牲になった第一次世界大戦の兵士の死と、前述のようにナチス親衛隊SSによるレジスタンスへのみせしめとして犠牲になった多数の市民、という大きな違いである。さらに、戦後一九五三年のボルドーの裁判の結果が、国家統合の名目のもとに市民を犠牲にしたものとなり、人々は国家の援助を断ったが、その時、遺族会はずまず犠牲者のための墓を自ら造ったのである。国家や権力と最も離れた位置にあった者たちが、虐殺された死者たちのことを永遠に記憶に残すための表象物として選択したのが、フランス共和国成立以前からの古い伝統であり、墓地に立つて代々の死者を見守ってきた「死者の火」の塔なのであった。

6 まとめ

儀礼伝承のダイナミズムに関連して、死の社会学を専門としているトニー・ウォルターは、ヨーロッパ、とくにイギリス社会の場合、戦争において学び取られたメカニズムを模倣することが、平和な時代における喪の規範に影響を与えてきたことを指摘している。そしてそのメカニズムとは忘却すること、記憶すること、そして哀悼の不可能性、という三種類であるという⁽¹⁴⁾。ウォルターは、戦争の時代という危機的状況のもとで、より明確に死に関することがらに人々が向かいあうのだというのである。

本稿で紹介したフランスの「死者の火」の場合、オラドール・スール・グラヌでは、虐殺の犠牲者への国家の裏切りという危機的状況のなかで、またコニャック・ラ・フォールでも地域の人々のつながりの希薄化という危機的状況のなかで、二〇〇一年に夏至の日のサン・ジャンの火祭りを人々が集まるイベントとして復活させ、さらに伝統的な「死者の火」に火を灯そうという人々の動きが出てきたという経緯が注目される。

儀礼の復活という事象は、たとえば日本の神社の神事、祭礼などでも

観察されることである。復活の背景には社会的、政治的、経済的要因が関連していると思われるものの、本稿の「死者の火」の事例ではとくに社会の危機的状況との関連性が指摘できよう。

註

(1) 近代における儀礼伝承の波状的展開について、新谷尚紀「儀礼の近代」(新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学』三 吉川弘文館 二〇〇六年)では「a波、β波、γ波」仮説を提示している。新谷は、近代の婚儀や葬儀の変化の中に、伝統的な儀礼習俗(a波)・伝統波、明治、大正以降、都市ブルジョワ層で行われるようになったホテル利用の結婚式や霊柩車の利用や告別式などの新しい儀礼習俗(β波)・創生波、そして、それが昭和三十年代後半以降の高度経済成長期を経て、経済力をつけた一般大衆にも受容されて大衆化した儀礼習俗(γ波)・大衆波」という三つの伝承の波でとらえることができると論じている。

また、松岡悦子「妊娠・出産―いま・むかし―」(新谷尚紀・波平恵美子・湯川洋司編『暮らしの中の民俗学』三 吉川弘文館 二〇〇三年)も出産習俗を例に、知識から実践へ、という世代による変化について指摘している。松岡は北海道の母子二世代を対象に、それぞれの子供に対して実際にどの産育儀礼を行ったかを調査した。具体的には、宮参り(シニア世代一〇パーセント、育児サークル世代四〇パーセント)、初誕生の一升餅(シニア世代第一子四五パーセント、末子五〇パーセント、育児サークル世代第一子七五パーセント、末子六八パーセント)などである。調査対象者の生年が記録されていないため、それについては推定せざるをえないが、傾向性の指摘として興味深いのは、現在子育てをしている当事者たちの母親世代が、知識としては知っていても実際には行っていないかった産育儀礼を、若い世代は自分の子供たちに対して行っているという点である。このような儀礼習俗の受容の背景についても、やはり高度経済成長期を経て、経済力をつけた一般大衆による儀礼習俗の受容が指摘できよう。しかし、新谷も松岡も、まだ一度途絶えた儀礼の復活という視点は十分ではない。一方、有職故実関係の資料には、儀礼の復活が確認される例が少なくない。たとえば賀茂の臨時祭の復活であるとか、伊勢神宮における二〇年ごとの式年遷宮で奉納される神宝類は昭和四年(一九二九)の遷宮に先立って組織された御装束神宝古儀調査会による調査・考証によって復元されたものである(近藤好和「伊勢神宮と神宝」国立歴史民俗博物館編『日本の神々と祭り―神社とは何か?―』二〇〇六年、七九ページ)。そもそも神宝(類)を永く保存しておく習慣がなく、撤下後、西宝殿に安置されるものの、次の遷宮に際しては土中に埋納したり、焼却したりして処分し

てきたのである。このような有職故実関係の資料からは伝統への回帰現象が確認される。

(2) 一九九八年度の国際シンポジウムにおいてもすぐれた外国人研究者の参加を得て実施しその成果も研究報告と一般書などで公開刊行しているように、日本の儀礼研究も基本的に国際比較の視点をもつものとして継続的に推進してきている。今日の基幹研究は日本歴史における通史的な研究を主題としたものであるが、日本の文化史研究とのいわば比較枠、参考枠としてこれまでも若干情報蓄積のあるフランスの死者儀礼に関する実地調査を試みたものである。二〇〇六年九月二三日・二四日の研究会において研究発表をしていたいただいたジャン・ノエル・ロペール教授、M・ルッケン教授の研究発表も同じく死者儀礼の比較文化論的研究の方向性に沿うものであった。

(3) 石田茂作「仏教考古学論考 四 仏塔編」思文閣出版 一九七七年、薮田嘉一郎編『五輪塔の起源―五輪塔の早期形式に関する研究論文集―』綜芸舎 一九五八年

(4) 新谷尚紀「両墓制と他界観」吉川弘文館 一九九一年、二二九―二二二ページ

(5) 新谷前掲註(4)、二二四―二二五ページ

(6) 大和、南山城、河内、和泉の平野部に郷墓、惣墓と呼ばれる大規模な墓地が分布している(野崎清孝「奈良盆地における歴史的地域に関する一問題―墓郷集団をめぐって―」『人文地理』二五―一九七三年)。数力大字から十数力大字、そして吐田極楽寺墓のように大規模なものは二二力大字で共同利用がなされている。それらの郷墓の特徴は、それぞれの郷墓の象徴的形像物である大型五輪塔が建てられていることであり、その年代は一三―一四世紀に遡ることができる(白石太一郎・村木二郎編『国立歴史民俗博物館研究報告 地域社会と基層信仰』一一二号 二〇〇四年)。

郷墓の墓地としての起源は五輪塔や十三重層塔などの石造遺物によって平安時代末期から鎌倉時代まで遡れるとされ、多くは律宗寺院の管理下にあったと考えられている(細川涼一「河内の西大寺末寺と惣墓」『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、一九八七年)。たとえば大阪府河南町寛弘寺神山墓地の総供養塔と考えられる正和四年(一一二五)の五輪塔の銘文から、この神山墓地が律宗寺院である寛弘寺の下級僧侶である齋戒衆の敬念らによって形成されたことを明らかにしている。そしてその郷墓が、墓寺の設置と三昧聖の定住をとまう一般庶民の利用する大規模葬送地として利用されるようになってくるのは、およそ一五世紀末から一六世紀半ばのことと考えられている。

(7) 関沢まゆみ「墓郷・水郷・宮郷をめぐる民俗学的考察」奈良盆地南西部・吐田郷の事例より」『宮座と墓制の歴史民俗』吉川弘文館 二〇〇五年

(8) ALLECER Les fanaux en limousin "Bulletin de la Société Archéologique

- du Limousin" tome XIII 1863
- (9) 石田勇治「シェノサイトと戦争」『岩波講座アジア・太平洋戦争』八 岩波書店 二〇〇六年 一六三―一六四ページ
 - (10) Inventaire des lanternes des morts-C.F.P.P.H.R.(2006-villedenevers@free.fr)
 - (11) Antoine Prost 'Les Monuments aux Morts (Culte républicain? Culte civique? Culte patriotique?' Pierre Nora, "Les Lieux de Mémoire" Vol. I La République, Éditions Gallimard, 1984 一九六ページ
 - (12) 前掲註(11) 一九〇一ページ
 - (13) 前掲註(11) 一九〇七ページ
 - (14) Tony Walter "On Bereavement: the culture of grief", Buckingham: Open University press, 1999

(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)

(二〇〇七年三月三〇日受理、二〇〇七年九月一四日審査終了)